

シノドスへの歩み みことばと共に 主の昇天 C 年

小西広志

2022 年 5 月 29 日

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は 2022 年 5 月 29 日、主の昇天となっています。今日の三つの朗読の箇所をシノドスの教会の観点から読んで味わってみましょう。

彼らと食事を共にしていたとき、こう命じられた

今日の第一朗読は『使徒言行録』の冒頭からです。1 節の献呈のことばを除いて、朗読箇所の構造を見てみると 2 節の「上げられた」と 11 節「またおいでになる」という対比する語で全体が囲まれています。3 節の「現れた」と 9 節の「見えなくなった」の対比があります。その入れ子のような構造の中にイエスさまのことばが 4 - 5 節と 7 - 8 節にあります。そして、イエスさまのことばに対する弟子たちの疑問を表す 6 節が中心点、つまり一番伝えたい箇所となります。

味わいたいのは 4 節です。次のようにあります。[イエスは]「彼らと食事を共にしていたとき、こう命じられた」。ユダヤ人にとって食卓を囲むことは大切な意味がありました。それは宴であると同時に、神の祝福を分かち合う場面でもあったからです。今日の朗読の食卓の場面で、イエスさまは弟子たちに命じています。これは指図とか指示というよりも、祝福を分かち合う食卓でなされたのですから、神さまからの祝福を受けとるという意味があるでしょう。新しい使命が授与されたのです。

現れ

今日の第二朗読を新共同訳で見えますと、三度「現れる」とあります（24、26、28 節）。24 節では「今や」とありますから、現在継続中の出来事として「現れる」ことになります。26 節では「世の終わりにただ一度」とありますので、すでに実現したこと、あるいは過去に完了した出来事として「現れる」ことになります。28 節は「現れてくださるのです」とありますから、これから起こる将来のこととして「現れる」のです。つまり、現在、過去、将来にわたってキリストは「現れる」ことをこの部分は伝えたいのです。

しかし、ギリシア語原文をよく読んで見ると、この三度の「現れる」は別な動詞が使われていることに気づかれます。24 節の「神の御前に現れてくださった」では動詞は「エンファニゾー」という単語です。英語でなにかを強調することをエンファサイズと言いますが、そのもとになったのがギリシア語のエンファニゾーで

す。天の神さまの御前で今やハッキリと見えるようにされてるという意味でしょう。

26 節は「ファネロー」というギリシア語です。ファネローとは、「長い間、覆い隠されてきたものが、はっきりと明らかにされること」を意味するそうです。このことばは、ステージや舞台に登場しようとしている役者が、登場するまでは隠れていますが、すでに出てくる用意はできている、という場合に使われた語だそうです。

28 節では「ホラオー」という単語が使われています。突然に、神が現れて人と出会うことを意味します。

このように巧みにことばを選び分けることで、終わりの時に現れる、来られるキリストを描きだしています。

必ず

『ルカによる福音書』24 章には印象的な表現を使いながら、イエスさまが復活なさったことの必然性を描いています。福音朗読からはずれてその点を少しお話ししましょう。

復活の必然性を示す三つのエピソードがあります。第一のエピソードでは「輝く衣を着た二人の人」(4 節)が婦人たちに思い出させるイエスさまのことばが印象的です。「人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている」(7 節)。

第二のエピソードはエマオの道を歩く二人の弟子に語ったイエスさまのことばです。「メシアは必ずこのような苦しみを受け、その栄光に入るはずではなかったか」(26 節 フランシスコ会訳)。

第三のエピソードはイエスさまが 11 人のお弟子さんたちの真ん中に立たれて言われたことばです。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する」(44 節 新共同訳)。

三つに共通するのは、「ねばならない」を意味する動詞の「デイ」が使われていることです。神によってそうするように定められている。当然そうなるようになっているという「必然性」の意味がこめられているのです。

イエスさまの十字架での死と三日目の復活は父なる神さまの救いの想い(救いの計画)の中では必然の出来事だったのです。

今日の福音朗読は三番目のエピソードと、それに続く復活したイエスさまの昇天の場面です。

ところで、50 節にある「ベタニア」に注目してください。どこがベタニアであったかはハッキリとしません。イエスさまはエルサレムに来ると、ベタニアを本拠地にして、そこからエルサレムへと通われました。ここにはマルタとマリアという二人の姉妹が住んでいました。イエスさまを喜んで迎え入れた家です(10 章 38 節参照)。弟はラザロでした(ヨハ 11 章参照)。このベタニアでマルタとマリア姉妹のマリアはイエスさまのことばに専心しました。

しかし、もう一つのベタニアと呼ばれる場所があります。それは、イエスさまがヨハネから洗礼を受けられ

たヨルダン川東岸です（ヨハ 1 章 28 節）。現在はアル・マグタスと呼ばれています。ここは伝承によれば 40 年間荒野をさまよったイスラエルの民が約束の地に入る際にヨルダン川を渡った場所だとされています（ヨシュ 3 章参照）。また、預言者エリヤがエリシャと共にヨルダン川をせき止め、東岸に渡った後に天に上げられた場所です（列下 2 章 8-14 節参照）。

今日の福音朗読にある「イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れて行き、手を上げて祝福された」（ルカ 24 章 50 節）のベタニアとは、エルサレムの近くのベタニアかもしれませんし、ヨハネが洗礼を授けていた場所なのかもしれません。しかし、もしかしたら象徴的な意味がこめられているかもしれません。つまり、マリアがイエスさまのことば、つまりいのちのことばに専心して聞き入ったように、そして、ラザロが死からよみがえった、つまりいのちを回復したように、さらには、ヨハネからの洗礼を通じてイエスさまの救い主としての使命が明らかになったように、ベタニアとは悔い改めといのちの回復に関連する象徴的な場所だったのです。

まとめ

今日の福音の最後のことばは、シノドス的な教会を考える上でとても重要だと思います。「彼らはイエスを伏し拝んだ後、大喜びでエルサレムに帰り、絶えず神殿の境内にいて、神をほめたたえていた」（52-53 節）。お弟子さんたちはイエスさまが天に昇っていくのを驚きをもって眺めつつも、すぐに喜びの感情が生まれました。彼らを包んでいた喜びとは何であったのでしょうか。どのような喜びを体験したのでしょうか。教会は喜びの場所です。言い争いでも、仲たがいでも、競争でもない。教会には喜びがあるのです。そして、喜びに包まれたお弟子さんたちは「神をほめたたえます」。しかも「絶えず、神をほめたたえます」。喜びは神さまから来ます。喜びを与えてくださった神さまへの賛美は、教会がなすべき本質的なところです。どのような状況になろうとも、たとえば悲惨な戦争の最中に教会があったとしても、そこには喜びと賛美はあり続けるのです。時として、わたしたちはこの真実を忘れてしまいます。それほどまでに現実の世界は、この世は、悲しく、怨みと憎しみに満ちているのでしょうか。この現実の世界にわたしたちは負けてしまうのかもしれません。呑み込まれてしまうのかもしれません。教会が喜びと賛美に満ちますように。

それではまた来週